

## 初期レヴィナス哲学の再検討：「ある」概念を中心として

小田，一彦  
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/2556516>

---

出版情報：哲学論文集. 55, pp.35-51, 2019-09-28. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# 初期レヴィナス哲学の再検討

——「ある」概念を中心として

## 序

小田 一彦

本稿は、『存在することから存在するものへ』、『時間と他なるもの』に代表される初期レヴィナス哲学における中心概念「ある」がどのようなことを示しているのかということを問いたただすことで、初期のレヴィナスがそれに託した意義を再検討することを目的とする。この問題設定は、初期レヴィナス哲学の重要性はいかなる点にあるのかという問題意識、とりわけ「ある」概念についてはその重要性が十分に強調されていないのではないかという問題意識を背景としている。というのも例えば、後に指摘するように、先行研究の中には解釈として疑念の残るものや、初期以降のレヴィナス哲学から論点を逆輸入しているとも解しうるものもあるからだ。これらの解釈は、言わば解釈として踏み込みすぎである。本稿の大部分がこれらの検討・批判に費やされ、また本稿の立場が一見消極的で必ずしも刺激的でないのは、そのような踏み込みすぎを避け、より着実な解釈を目指すためである。上述の著作は、フッサールやハイデガーの研究から出発したレヴィナスが独自のスタ

ルで独自の哲学を展開し始めたものであり、それゆえの解釈し難さを有している。そうであるからこそ、先行研究に比べてより慎重であるように努めるといえるものが本稿の立場である。

本稿は上述の問題追究のために、まず「ある」の概念と、それと不可分の「イポスターズ」の概念を確認する（第一節）。次いで、先行研究の解釈がどのように「ある」概念の意義を特徴づけているかを検討することで、レヴィナスの議論の意義を解し難くしてしまう解釈を退けつつ、どのようなことがいまだ明確にされていないのかを明確にする（第二節）。最後に前節で明確化された問題をレヴィナスのテキストに即して検討し、「ある」概念の意義を提示する（第三節）。

## 第一節 「ある」と「イポスターズ」概念の確認

本稿が問題とする「ある」の概念はレヴィナス哲学において、存在するものと存在することとを区別した上で、両者が分離された「存在者なき存在すること」として、次のようにやや唐突に語り出される。

いかにしてわれわれは、この存在者なき存在することに近づこうか。すべてのもの、諸存在や人々の無への回帰を想像してみる。われわれは純粋な無に出会うのだろうか。このすべてのものの想像上の破壊の後に、何もものかではなく「ある (être)」という事実が残される。すべてのものの不在、一つの現前として回帰する。すべてが沈み込んだ場として、大気の濃密さとして、空虚による充実として、あるいは沈黙の眩きとして回帰するのだ。諸物、諸存在のこの破壊の後には、非人称的な存在することという「力の領野」がある (TA 25-26)。

この非人称的な「存在者なき存在すること」、「ある」は、「夜」、「覚醒」、「不眠」といったものを経験的な手引きとして敷衍

される。

夜の空間があるけれども、それはもはや空虚な空間ではない。(中略)暗さが中身のようにそれを満たしており、夜の空間はいつぱいであるのだが、それは全く何もないという無によっていつぱいであるのだ(EE 84)。

夜の目覚めは匿名的である。不眠のうちには、夜に対する(私)の警戒があるのではなく、目覚めているのは夜そのものである。それが目覚めている(EE 96、強調の後者は筆者による)。

私の目を開いたままにする不眠の警戒は主体を持たない。それは不在によって残される空虚における現前の回帰そのものである。——これは何かの回帰ではなく、一つの現前の回帰である。これは否定の只中における「ある」の目覚めである(EE 95)。

すべてのものの無への回帰という想定上、存在するという動詞の主語に当たる主体、存在することを引き受ける主体は存在しない。そのような状況下においてもなお認められる「ある」はそれゆえ、その主体から純化された存在するという働きそのもの、非人称的な存在することである。このような「ある」についての経験が、夜の空間についての経験、不眠の経験、不眠という警戒状態の経験に求められる。そして、これらの経験において「ある」が回帰することが最後の引用文で強調されている。つまり上掲の引用を通して「ある」概念について強調されていることは、約言すれば、「ある」が有する、存在者とは分離された純粹な存在することの動詞性ないし存在するという動詞の働き、その非人称性、および無を通して「ある」が回帰するという逆説的な無の可能性あるいは「ある」の不可避性である。<sup>2)</sup>

レヴィナスは以上のように「ある」概念を規定した後、「イポスターズ (hypotheses)」の概念を提示する。それは、「匿名的な『ある』において主体が肯定される」(E119)ということ、「非人称的な存在における実存者ないし実詞の出現そのもの」(ibid.)である。これは「『ある』という匿名的な警戒から自身を引き離す」(ibid.)ことによってなされる。それゆえこの意味で、「ある」は「『イポスターズ』が生じる場」(TA28)であり、両概念は主体にとって不可分のものである。それどころかさらに、「ある」において「イポスターズ」が起こるといふ両概念の関係の仕方は、主体の「誕生」<sup>3)</sup>として規定される。ところで、このような「ある」概念と「イポスターズ」概念について、これだけではレヴィナスの議論がいかなる意義を有するものであるかは判然としない。

ある哲学者が展開した独自の思考の意義をはかるには、独断論に陥らずに新たな哲学・哲学史的議論が展開されるようになるというような結果がそれによってもたらされるのかどうかということと、その結果がもたらされる、方法ないし道筋とが納得のいくものでなければならぬだろう。しかしながら、とりわけレヴィナスは自らの哲学の方法や目的を掲げずに淡々と記述を行うため、この目的や方法論が明確ではない。すなわち、レヴィナスの記述においては、例えばデカルトの方法的懐疑のように絶対確実に存在するものを見出すという目的のための方法として規定されているわけではないので、「すべてのものの想像上の破壊」という操作の後に見出される「ある」をいかなるものとして理解するべきであるかということ、これによっていかなる事柄が抉り出されているのかということ、この「ある」概念が有する哲学的意義が必ずしも自明ではない。それゆえにまた、この方法的手続き自体の説得性も自明ではない。レヴィナスの議論の判然としなさの原因はここにある。そこで次節においては、「ある」と「イポスターズ」とのかかわりを論ずる解釈を、それらが「ある」概念をいかに意義づけているかという観点から検討する。先行研究の解釈に理解しがたい点、踏み込み過ぎている点、その解釈し難さゆえに含まれてないだろうか。あるいは、「ある」概念を通してレヴィナスが問題化しようとしている生の在り方を直接論じることが避けているという側面はないだろうか。

## 第二節 先行研究の検討

### (1) 検討のための予備的考察

以上のように提示される「ある」と「イポスターズ」とのかかわりについては、レヴィナス自身がどの程度力点を置いているか判断としないものの、彼のテキストにしたがってこれを主体の「誕生 (naissance)」として理解し、その点を強調する解釈が、すでにいくつか提出されている。そこで以下の本節においては、屋良、平岡、フランク、セバーらによる上述のような解釈がどのように「ある」概念を意義づけようとしているのかという点を検討する<sup>4)</sup>。

さて、誕生という言葉には、少なくともその日常言語としての意味において時間とのかかわりが前提されていると考えるのが自然だろう。というのも、それまでの時系列においては存在しなかったものが存在し始めるという出来事を指して、誕生という言葉を通称われわれは用いているように思われるからだ。この言語使用についての感覚が自然であるとすれば、この自然な感覚が解釈者の解釈方針を背後で規定してしまい、「ある」概念についてのレヴィナスの議論が持つ意義を曇らせてしまっている恐れがある。そして、この自然さに含まれる先後性を最も強く前面に打ち出す解釈が、屋良による解釈である。

### (2) 「ある」の原初性を強調する解釈

屋良は、「ある」概念を、「主体がまだ存在していない原初的な存在の『混沌状態』」、「われわれの成立する以前」、「存在者がまだ出現していない〈存在〉(Being)の段階」などと解する<sup>5)</sup>。その上で、以上のような状態ないし段階から『主体』が出現する「主体の誕生」<sup>6)</sup>が「イポスターズ」であると指摘し、「ある」と「イポスターズ」とのかかわりは「いかにして主体

が生起するかを存在論的出来事として記述する」ものであると屋良は主張する。この解釈は、まず、存在者なき存在することとしての「ある」があり、次に、そこから主体が誕生するという枠組みを有しているとみなさざるをえない。それゆえ屋良は、主体誕生の「瞬間」という「間」は「未だ時間性が成立していない段階から、まさに『今・現在』が成立する過程」だと指摘しながらも、その「間」における何らかの意味で時間的な先後性を解釈の背景に据えているのだ。

このような解釈は、上述の先後性が自身の否定する時間性とどのように異なるかということの説明することを要求されるという困難を抱える以上に、その内容の事柄としての理解可能性が問題視される。まず「存在者なき存在すること」があつて、次にそこから主体が出現するという事態はいかなるものであるのか。この解釈のもとでは、「ある」から「イポスターズ」がなぜ起こるのかということについて、説明することが要求されるが、説得的な説明をなすことは困難なのではないか。実際、屋良はこの問いを手掛かりに考察を進めているけれども、このような説解方針は、「もちろんわれわれは、どうしてこのことが生じるのかということの説明できない。形而上学のうちに自然学は存在しない」(TA3)と述べられることで、実はすでにレヴィナス自身によって否定されている。

また、仮に屋良の論述が事柄の論理的順序に沿うもので、決して時間的順序を前提していないとしても、根本的な問題は解決されない。というのも、「ある」がなぜ「原初」とみなされるのかという問題が依然として残されるからだ。これに対して、そこから主体が誕生してくるからだと応じることは、レヴィナスの議論を無批判に鵜呑みにすることに他ならない。問われているのはむしろ、レヴィナスの議論枠組みを説得的にする、「ある」概念が有する事柄としての意義はいかなるものかということなのだ。

屋良の解釈は「誕生」という言葉の日常的意味に引き摺られているくらいがある。だからこそ、「ある」を時間的なし論理的に先行する「原初」として解しようのだ。

上述の論点について、平岡の立場は判明ではないものの、「ある」と「イポスターズ」との関係を「プロセス」だと強調す

る点において、それは屋良の立場に近いとも解しうる<sup>(8)</sup>。仮に平岡が「プロセス」ということを強調することで、何らかの時間的先後性をモデルとしてしているとすれば、屋良に対する上述の批判が、平岡の解釈にも妥当する。あるいは「プロセス」ということで、論理的プロセスを平岡が意味していたとしても、屋良の場合と同様の問題が残される。後述するように、平岡は「ある」概念を「超越論的水準」として位置付けるのであるけれども、なぜ「ある」が超越論的水準であるのかという問題、この時期のレヴィナス哲学における「超越論的」とはいかなる意味であるのかという問題が依然として残されるからである。「超越論的」ということで、もし平岡が主著『全体性と無限』で展開されるレヴィナスの「超越」概念を読み込んでしまっているのであれば、それは時期を錯誤したレヴィナス解釈である。

フランクによる解釈はこの点について慎重にも、「ある」と「イポスターズ」の両概念のかかわりを、時間的先後関係を背景にして理解しているとみなされる恐れのあるような記述を避けている。

それに対して、セバーによる解釈は、フランクの立場よりさらに踏み込んで、「この実存者という特殊な存在者の出現は『ある』からの引き離しという孤独において全面的に、まさしく、一挙に作動する」と述べることで両概念のかかわりの同時性を強調する<sup>(9)</sup>。

本稿における筆者自身の立場は、セバーのそれに賛同する。「ある」と「イポスターズ」はレヴィナス哲学における主体性の不可分な契機であり、それらは同時的である。このことは、先の注に引用したレヴィナスの証言に加えて、次の論述からも明らかである。

この支配力の終焉は、われわれが、経験的世界に埋もれながら見ることを通して出来事を引き受ける仕方によってではなく、われわれがもはや引き受けない出来事が生じることが可能であるような仕方、存在することを引き受けたということを示している (TA62. 強調は原文)。

この箇所は、『時間と他なるもの』においてレヴィナスが自身の思考の核心を語りだそうとするところである。自己の存在との関係を取りむすび、外界とかわつていきながら自己を統御する力としての「支配力の終焉」、強調付きの「出来事」はまさしくその核心にかかわることがらである。これらの内実についてここで詳細に検討することはできないが、本稿の論脈にとつて重要であるのは、レヴィナスが「他者」とのかかわりをめぐる自らの積極的主張を打ち出す時に、そのかかわりを存在すること (exister) をひきうつける「仕方 (manière)」として展開しようとするというところである。「ある」すなわち「存在者なき存在すること (exister sans existant)」と「イポスターズ」とのかかわりは、まさしくそのような「仕方」そのものを示すものである。両者はその「仕方」の契機に他ならない。

そういうわけで、「ある」概念を「原初」と解したり、「超越論的水準」と解したりする解釈は、この時期のレヴィナス解釈としては踏み込み過ぎである。実際レヴィナスのテクストも「ある」概念をめぐってこれらを強く打ち出しているわけではない。続く小節においては、フランクとセバーによる、屋良とは異なる仕方で「ある」概念の意義を際立たせようとする解釈を確認する。

### (3) 「ある」概念をめぐる議論から帰結する哲学史・思想史的意義を強調する解釈

フランクによれば、『存在することから存在するものへ』における「イポスターズの分析は、存在の全体構成における存在者の意義を規定し、存在と存在者との差異を導き出すことを目標としていた」<sup>10</sup>。このことは、ハイデガーの『存在と時間』の探究を引き継ぐものである<sup>11</sup>。なぜならば、フランクの見立てによれば、ハイデガーが『存在と時間』の末尾に残した問いは、根源的時間は真に存在の地平になっているかということであり、この問いは、存在了解の地平つまり存在者との差異を有する存在を了解することの地平を問うこと、すなわち「存在論的差異の起源へと遡ること」を要請するからである<sup>12</sup>。存在者なき存在すること」と「イポスターズ」とのかかわりを主体の「誕生」として論述するレヴィナス哲学は、まさにこの遡行を

行っているというわけだ。

セバーもまた、初期レヴィナス哲学の『存在と時間』におけるハイデガー哲学に対する根底性を主張する。彼によれば、『存在と時間』における死の分析を意義づけるためには、現存在が真に「誕生」していなければならない。なぜならば、誕生していないものは死ぬことができないからである。この当然の事実を証し立てるのが「ある」と「イポスターズ」の分析である。セバーはレヴィナスが「ある」の不死性を強調することを下敷きにして、これを「死ぬことの不可能性」と解し、「ある」もの、すなわち「死ぬことが不可能なものは（中略）幽霊だ」と指摘する<sup>13</sup>。それゆえ、この「ある」から主体が身を引き離す「イポスターズ」が成立していなければ、すなわち主体が「誕生」しなければ、回帰する「ある」の不死性に脅かされて死は可能にならない。セバーの解釈は「ある」からの主体の「誕生」というレヴィナスの分析を死の可能性の条件として明確化するものであり、それゆえこの解釈において、レヴィナス哲学は『存在と時間』のハイデガー哲学が重視する死をより厳密に説明するという意味において、『存在と時間』のハイデガー哲学よりも根底的である<sup>14</sup>。

以上のフランクとセバーによる両解釈は、「ある」と「イポスターズ」とのかかわりの重大性を前面に打ち出す初期レヴィナス哲学の哲学史・思想的実り豊かさを示すものである。しかしながら、このことは「ある」概念をめぐるレヴィナス哲学が有する意義を全面的に明らかにするわけではない。レヴィナス哲学が、哲学史・思想史的研究ではなくて独自の思想を展開するものである以上、「ある」概念はその内で何らかの意義を有しているはずであり、上述の哲学史・思想的意義はこれを必ずしも明らかにするわけではないからだ。主体誕生の契機である「ある」が彼の哲学の内ではいかにとらえられているのかを検討せねばならない。

#### (4) レヴィナスの問題提起を振り出すとする解釈

前節末尾でも述べたとおり、「ある」についての議論は、われわれの具体的経験のあり方のいかなる部分を振り出して論じ

ているのか判然としないものである。フランクは、レヴィナスの議論への批判を織り交ぜながら『存在することから存在するものへ』を読解しているものの、「ある」概念それ自体の妥当性については「われわれは、あるを経験することができるか<sup>16</sup>」と問いかけるにとどめ、これを本格的に検討することはない。フランクとセバーの解釈は、レヴィナスがあげる以上の経験的指引きを用いて「ある」概念が示す事柄を説明するわけではない。強いてあげるのであれば、両者は「ある」概念を解釈する指引きとして精神病をあげる<sup>17</sup>。しかしながら、これがわれわれに何か事柄の理解に資する材料を与えてくれるわけではない。仮に、「ある」が示す事柄がわれわれにとって説得的なものではないとするならば、レヴィナス哲学の意義は大きく損なわれてしまうだろう。

この点について示唆的であるのは、平岡論文である。平岡は、「光」によって「経験」が成立するという「ある」以外の初期レヴィナス哲学のモチーフと「ある」概念とを対比することで、「ある」概念の有する意義は「光」による「経験」には回収されない領野への「経験領野の拡大」であると主張する。そしてこの拡大によって、世界をめぐる経験に先立つ超越論的な水準」を開くことができ、「世界経験とは異なる構造をもった経験」を、「経験領野の内部に位置づけることができる」「高次の経験論」にレヴィナス哲学はなると彼は論ずるに及ぶ<sup>18</sup>。この解釈の優秀さは、「ある」概念自体が有する意義を明確にできる点にある。その一方で、「ある」ということについては、消極的に語られているにとどまり、そのため「ある」概念によって経験領野がどのように拡大されているのか積極的に語られていないという欠点がある。

#### (5) 先行研究に対する検討の総括

以上における先行研究の検討によって以下のことが明確になった。第一に、屋良のような「ある」を「原初」とみなす解釈は、そもそもレヴィナス自身「ある」が「原初」だということをテキスト上で明確に打ち出しているとは解し難いという問題を度外視したとしても、レヴィナス哲学の意義を十分に際立たせられず、むしろさらなる問題を招くことになるという

ことである。「ある」と「イポスターズ」とは主体の誕生という出来事の同時的契機とみなされなければならない。

第二に、フランクとセバーの解釈は初期レヴィナス哲学がもたらす哲学史・思想的成果を明確化できるものの、「ある」概念そのものが示す事柄とそれ自身が有する重要性を明示しないことである。

これに対して第三に、平岡の解釈は初期レヴィナス哲学における「ある」概念の重要性をレヴィナス哲学に内的な分析によつて強調しているものの、「ある」概念が示す事柄を消極的にしか示しきれていない。

以上を総括すれば、「イポスターズ」と同時的な「ある」が示す事柄がいかなるもので、その導入によつて何がもたらされるのかということが、先行研究の問いきれていない問題である。本稿は以下において、レヴィナスのテキストに即してこれを明らかにせねばならない。

### 第三節 「ある」概念

そもそも、「存在者なき存在すること」「ある」とは、いかなる事柄を指しているのか。レヴィナス自身が述べているように、内実を欠いた「言葉に過ぎない」のではないか。「ある」概念には、事柄としてどのようなものを包摂しているのか解し難いという側面がある。この、「ある」概念の解釈としては、パトチカによる「非主観的現象学」の構想や、ハイデガーの現象学的還元のとらえ方、「現象学的から独我論的要素を除去することに意を注いだメルロ＝ポンティ独自のフッサール解釈」に接近させてこれをとらえる解釈がある。<sup>19)</sup> この解釈は「ある」についての議論そのものが有する重要性を示唆するという意味で魅力的ではあるものの、ここにおいてはレヴィナスの独自性が理解されず、<sup>20)</sup> それゆえ、他ではないレヴィナスの議論がなぜ重要であるかが開明されない。また、「不眠」や「警戒」、「夜」といったレヴィナス自身が範例として持ちだすことがらを強調したり、「ある」という存在の根深さを強調したりするだけでも同様である。結局、「不眠」や「警戒」、「夜」といっ

たことでレヴィナスが示そうとしている経験のあり方と、それによって打ち出されるレヴィナス独自の主張が問題であるのだ。以下の本節においては、「ある」概念に当然向けられるべき問いを手掛かりに、これらを明らかにすることが試みられる。

文字通り、存在することとかかわる存在者が存在しないのであれば、そもそも、なぜ「ある」といえるのか。「ある」とかわる何らかのものがなくかぎり、「ある」ということは認められえないのではないか。そうでなければ、初期レヴィナス哲学は存在するという働きについての素朴实在論となってしまうのではないか。<sup>21)</sup>「ある」の概念については、このような概念が当然向けられるべきである。しかしながら、彼の立場はそのようなものではない。「現代哲学における存在論の復興はもはや实在論といかなる共通点も有していない」(BE 88)と述べられているとおりである。存在とかかわるものを度外視した形で存在それ自体を論じるような实在論とは、自らのそれも含めた当時の存在論は無関係だということだ。したがって、「存在者なき存在すること」といっても、そこにはその存在することとかかわる何らかのものがあると解さねばならない。この「存在者なき存在すること」と関わるものとしてレヴィナスは非人称的な「ひと、(on)」(BE 82)を考えている。「ある」概念は「存在者なき存在すること」へ「ひと」が融即しているという事態を示している。

それでは、「ひと」が「ある」に与する・融即するとはより具体的にいかなる事態を示しており、これを論じることでレヴィナス哲学はどのような重要性を獲得するのであるうか。上述のように平岡は、レヴィナスが主体の世界との関係の仕方、われわれの経験のあり方を「光」というモチーフでもって特徴づけること<sup>22)</sup>に着目し、これとの対比で、「光」による「世界経験」とは異なる経験として「ある」を規定する。そうすることで「ある」についてのレヴィナスによる議論を経験領野の拡大とみなすのである。それでは、「ある」の経験、すなわち「光」による経験に回収されない経験とは、積極的にいかなるものなのか。以下において本稿は、この平岡の解釈を手掛かりとし、敷衍することによって、これを明らかにする。<sup>23)</sup>

さて、この「光」という比喩的モチーフでもって示唆されているのは、「見ること」(vision)という実存の仕方の一契機である。なるほどレヴィナスはこれを前面に打ち出しているわけではないが、その背景はうかがい知ることができる。<sup>24)</sup>

そうだとすれば、「ある」の経験、すなわち、「存在者なき存在すること」と「ひと」とのかかわり、平岡の主張する拡大された領野とは、「見ること」によらない存在とのかかわり方に他ならない。顧みるに、「ある」概念を導入するためにレヴィナスが要請する「すべてのものの破壊という想像」は、われわれに「見ること」シャットダウンさせる効果があった。目を開いて「見ること」を遂行するかぎり、われわれは常に何らかの存在者が存在することを知覚してしまうがゆえに、瞳を閉じて「見ること」を停止しない限り、そのような事態を想像することはできないからである。では、レヴィナスの主張する「見ること」によらない存在とのかかわり方は積極的にはどのようなものか。

たとえば夜や無の沈黙であるとしても、何かが起こっている (EE81)。

無そのものの根底においてざわめくこれを、「ある」という術語でわれわれは規定する (Ibid)。

それ「夜と「ある」という非人称的で実詞を欠いた出来事…筆者補足」は空虚の密度のようなもの、沈黙のざわめきのようなものである。(中略) この存在・密度、雰囲気、場に対して、われわれは注意を喚起する (EE90)。

上掲のテキストにおいては、沈黙、ざわめき、密度といったことが強調されており、それによって、「ある」とのかかわり方が、聴くことや、五感では表現しづらい密度の感受として際立たせられている。ざわめきを聴くことによって何かが「ある」ということを窺い知ること、気配を感じることにによって何かが「ある」ということを察知すること、これらが「ある」という概念を用いてレヴィナスが打ち出そうとした「存在すること」とのかかわり方である。

「すべてのものの無への回帰」という想定によってわざわざこのかかわり方を強調しているということは、裏を返せば、レ

ヴィナスは存在者が存在することを了解する主体の在り方は何よりもまず「見ること」であるとすると存在理解が主流だとみなしているということである。「存在者なき存在すること」とは「単なる言葉に過ぎない」のではないかというレヴィナスによる読者への問いかけは、自らの議論の意義を問うとともに、存在とのかかわりとは、「見ること」を通じた存在者の存在の了解だというわれわれの前提を暴き出しているのだ。このような「見ること」を通じた存在者の存在の了解という存在とのかかわり方こそ、われわれの存在とのかかわりだという見解は、われわれの生活実感に根を下ろすものであるがゆえに強固である。

これに対して、レヴィナスは「見ること」とは異なる存在とのかかわり方を振り出ししている。「ある」とのかかわりにおいては「見ること」が原理上排除されており、「事物の形は夜に溶解する」(EES) がゆえに、人称的な存在者があるのではなく、非人称的な何かが「ある」ということになるわけだ。

以上のように、「ある」概念は「見ること」ではない「聴くこと」や「雰囲気」を感受することといった、「見ること」とは異なる存在することとかわる仕方を示すものである。このことは重大な意義を有している。

なぜならば、レヴィナスによれば「光は、プラトン以来、あらゆる存在を条件づけている」(EES) からである。すなわち、この大胆な総括を留保付きで受け入れるのであれば、「見ること」とは異なる、存在することとかわる仕方を論じる「ある」の概念は、従来の存在論を根本的に刷新するという企図を持っていることになるからだ。「ある」概念を打ち出すレヴィナス哲学は、「見ること」中心の従来の哲学を批判し、刷新するという重大な課題を託されているのだ。

## 結論

「存在者なき存在すること」すなわち「ある」の概念は、「原初」や「超越論的水準」とは解釈されえない。そうではなく

て、「見ること」ではない、「聴くこと」や気配を感じ取るという仕方、存在することとかわるという、「ひと」と存在することのかかわり方を抉り出すものである。このことを本稿は、「踏み込みすぎ」な解釈に陥ることを避けながら、平岡の解釈をしたじきにしつつレヴィナスの論述を典拠にすることで明らかにしてきた。この「ある」ということは「イポスターズ」同様、主体の「誕生」の契機である。それゆえ、レヴィナスの〈私〉においては、「ひと」として「ある」にかかわるといふ側面と、主体として世界とかかわるといふ二つの側面があり、これら両側面のかかわりとして、主体の「誕生」が成立している。「見ること」ないし「光」とは異なる仕方と存在とかかわりながらも、そこから「身を引き離す」としての「イポスターズ」によって「誕生」する〈私〉を論ずるこの思想は、「見ること」とは異なり、それに依存しない存在とかかわりを際立たせ、「見ること」に特権を与える従来の存在論を刷新するという、重要な目的を有している。「見ること」を中心し存在を了解するということは、われわれの生活実感にも適合するがゆえに、なおさらである。このことは、以下の通りの従来の存在論に対するレヴィナスの見立てを含意している。第一に、従来の存在論は一箇の統一された存在者ないし存在者の存在を対象としてきたことである。第二に、そのような存在論はより根本的には、「見ること」に特権的な意義を認めるものであるという見立てである。<sup>(25)</sup>「ある」をめぐる議論は、経験領野の「拡大」というよりもむしろ、われわれの存在をめぐる経験の枠組みそのものを問い直し、再構築しようとするものなのである。

註

(1) 本稿で引用・参照する初期レヴィナス哲学の重要テキストについては以下の略号を用い、提示にあたっては、これと該当頁数のみを示す。なお、これらからの引用については拙訳を提示する。

EE: *De l'existence à l'existant*, [1947/1978], J. Vrin, 2013.

TA: *Le temps et l'autre*, [1948/1979], P. U. F., 2014.

(2) Cf. TA 26, 28, EE 86.

(3) 例え<sup>ば</sup>, EE 24, 27, 122, などに見られる。

(4) 屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス——他者への覚醒』（東信堂、二〇〇三年）、平岡紘「経験領野の拡大——前期レヴィナスにおける「ある」概念をめぐる」（東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室編『論集』、第29号、二〇一一年）、Didier Franck, *Dramatique des phénomènes*, P. U. F., 2001, François-David Sbbah, *L'épreuve de la limite: Derrida, Henry, Levinas et la phénoménologie*, P. U. F., 2001, をそれぞれ参照。

(5) それぞれ、屋良『前掲書』、一〇三、一〇五、同頁。強調は筆者による。

(6) 同前、一〇五頁。

(7) 同前、一〇四頁。

(8) 平岡『前掲論文』、一四〇頁、一四三頁などを参照。もっとも、屋良においても、その解釈にあつて時間的先後性が前提されていると断言しきれない側面がある。屋良が「ある」を「超越論的領野」と理解しているからである。すなわち、「ある」の先行性は、屋良において実は「超越論的領野」ないし地平としての先行性であつて、決して時間的先行性ではないとみなしうる。しかしながら、上掲の屋良の論述をみる限り、その先行性を理解するために屋良は時間の先後関係をモデルとしているというくらいは、それでもやはり拭いされない。

(9) Sbbah, *op. cit.*, p. 187. 強調は原文による。

(10) Franck, *op. cit.*, p. 101.

(11) Cf. *ibid.*

(12) Franck, *op. cit.*, p. 75.

(13) TA 27.

(14) Sbbah, *op. cit.*, p. 174. 強調は原文による。

(15) Cf. *ibid.*, pp. 174-179.

- (16) Franck, *op. cit.*, p. 87.
- (17) *Ibid.*, p. 88, Sebahn, *op. cit.*, p. 183.
- (18) 平岡「前掲論文」一三八頁以下を参照。
- (19) 井原木大祐『レヴィナス——犠牲の身体』（創文社、二〇一〇年）、二二頁を参照。
- (20) 例えば、レヴィナスは次のように述べる。「この存在することの匿名性に言及することで、私は、哲学の教科書において人がそれについて語る、そこにおいて知覚が事物を切り分ける未規定の基底を考えているわけでは決してない」(TA 26)。裏を返せばすなわち、彼は地平やそれに類するものとしての意義を「ある」概念に与えているわけではなく、むしろそれらにとりつくされないう意義を論じようとしているのである。
- (21) 存在そのものの運動性を強調する屋良の解釈は、この点を肯定することになりかねない。屋良『前掲書』、一〇八—一〇九頁を参照。
- (22) Cf. EE 63-70, TA 47-49
- (23) それゆえ、本稿の解釈は平岡のそれに共鳴するものである。しかしながら、前節において提示した論点および、「ある」と「イボスターズ」とのかかわりを「経験を条件づける超越論的なもの」と解する点については、本稿は立場を異にする。とりわけ後者については、従来の枠組みでレヴィナス哲学を特徴づけることは、かえってレヴィナス哲学の独自性をみえなくさせてしまう恐れがあると考えるからである。ただし、この点についてここで詳細に論ずることはできない。
- (24) Cf. EE 65, TA 47, note 4. および前節で引用した「時間と他なるもの」テキストにおいても「見ること」と世界経験とが結び付けられている。
- (25) ここで、レヴィナスが想定している論敵がハイデガーであるということにはありえる予想である。というのも、『存在と時間』のハイデガー哲学においては「見ること (Sicht)」が重要な役割を果たしているからである。 Cf. Martin Heidegger, *Sein und zeit*, [1927], Max Niemeyer Verlag, 2006, S. 146 ff. ただし、この点についてのレヴィナスの見立ての是非は、さらに慎重な検討を必要とするだろう。